

ま え が き

学校といえば、そこには子どもたちの毎日通う教室があり、席の決まった机があり、そこでイスに腰掛けた子どもたちが正面の黒板や教師の言葉に視線や意識を向けながら、所定の時間割に沿って教科書等を用い学習活動を繰りひろげていく一連の情景が思い浮かびます。幼稚園も学校の一種ですが、そこでの様子はこうした情景とはかなり異なったものであることに、幼稚園に足を運んだ人であればすぐに気づくはずですが。子ども達は保育室や園庭、そして園内のいたるところで、こちらでは一人黙々と、そちらでは気のあった仲間たちと、あちらでは教師も一緒になって、めいめいに多様な遊びを楽しんでいる姿に出会います。そこで目にする光景には冒頭で述べたような学校イメージからすると戸惑いを感じる人が多いかもしれません。

幼稚園での教育は、幼稚園教育要領によれば、「幼児の主体的な活動を促し」「幼児の自発的な活動としての遊び」を通して指導するものであって、幼児が「自ら意欲をもって環境とかかわること」、そして「人やものとかかわりを通して、多様な体験をする」ことが重視されています。

遊びといえば、通常、児童期以降では知的活動や生産的活動からの息抜きとして捉えたり、あるいは習練して培った技能を発揮する技巧や感性の秀逸さがものをいう活動として捉えがちですが、幼児期の教育の中で重視される遊びはこれらとはかなり異なる捉え方に立っています。すなわち、幼稚園での生活の中心をなす遊びには、人生の初期段階にあって社会的相互作用や認知的刺激を豊かに経験し深める活動として、以後の長い人生で必要となる行動力や認知的技能の基盤を耕し伸長していくという重要な意味合いが込められています。子どもたちの遊んでいる姿を目にすると、一見して、素朴なファンタジックな世界やメルヘンチックな夢物語に浸っているにすぎないと等閑視しがちですが、夢中になって遊ぶ姿にこそ人間形成にとっての大事な要素が秘められているといえます。

本園では、園の教育目標を踏まえて、幼児一人一人が人やものとかかわりながら「自発的な活動としての遊び」が展開できるように、教師の働きかけを含む物的・空間的環境の構成に意を注いできました。しかしながら、幼小連携や幼小接続を志向する実践の進捗や子ども達の遊び環境の変容のなかで、あらためて幼稚園における遊びの姿をどのように見通して教師はかかわればよいのか、また遊びの中での学びをどのように読み解けばよいのか、こうした点を吟味していく必要があると考え、「幼稚園における遊びを探る」という研究テーマを掲げました。今年度はこの研究主題の下での初年度として「遊び込む姿をめざして」を副題とし、幼児の遊ぶ姿の分析に焦点を当てて考察しています。

今年度は、本園において6月と11月の2回にわたって保育を公開します。これまでの研究の成果を含めて、私達の取組について様々な観点からご覧いただければ幸いです。あわせて、どうぞ忌憚のないご意見、ご指摘、ご感想をいただきますようお願いいたします。

最後に、熱心なご指導をいただきました諸先生方をはじめ、ご多用の中ご来会いただきました皆様に心より御礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

平成25年6月

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園長 田邊 俊治